

「植林は百年の大計」

二中時代の校長の理想が今も具体的な形で残っているものをもう一つ挙げるなら、それは学校林であろう。昔は「二中山」、今は「西高山」と呼ばれている山林である。学校が山を持っていることを知らない同窓生は意外と多いが、盤溪と南の沢にある計約四〇ヘクタールの山林は、れっきとした西高の財産である。

源流をたどると、第六代校長の阿部与作にさかのぼる。阿部は海外教育視察団の一員としてアメリカやヨーロッパを視察した経験があり、一九二七年（昭和二年）に釧路中学校



阿部与作校長

長から二中校長に転じた。「私は華やかな言葉を列ねた大演説よりも、黙々たる一小善の実行が好きだ」（其中会雑誌一四号）と書いているように、飾り気がなく朴訥な人柄だったが、自由主義的な思想と国際感覚の持ち主であった。例えば、貧困対策として日本は移民政策が必要であることを説きながらも、「その地の風俗、習慣に同化し、その国の善良なる国民となり、場合によりては国籍を離れて在住地の国民となる覚悟を持たねばならぬ。偏狭なる愛郷心、愛国心は共鳴者が少ない」（其中会雑誌一七号）と、狭量なナショナリズムを批判している。

阿部は「造林育人」の理念の下、学校林を構想した。「木を植えることは百年の大計で、人間を育てることと同じである。五〇年もたてば、きつと役に立つ」という確信があった。日本の学校林は、一八九五年（明治二八年）に来日したアメリカ人の教育家ノースロップが緑化思想を紹介し、文部省も普及に努めたことで全国的に広がった。一中也学校林を所有しており、当時はひとつのステータスだったとも言えるが、教育の中に植樹を取り入れるという思想に阿部が共鳴したのは自然のことだった。

まず、其中会の資金を活用して、琴似村盤ノ沢（盤溪）の山林を購入し、これを「二中山」と名付けた。三〇年後を見通した四期計画のもと、其中会に植樹部を設け全校挙げて

■自由主義

個人の権利や自由を基本に、社会のあらゆる領域における自由な活動を重視する思想。一七―一八世紀の市民革命の成立と資本主義の興隆とともに発達した。本来は国家の規制や干渉を最小限にとどめることを唱えたが、二〇世紀以降は労働者や消費者の社会的自由を尊重し、富の再分配を是認する思想も含む。

の植林事業を始め、毎年春の一大学校行事として取り組んだ。

一九四二年（昭和一七年）までの一五年間にカラマツ、トドマツ、ドイツトウヒなど延べ約一万六千本が植えられた。その年、新たに南の沢の土地を購入し、以来、二つの山林で植林は続けられてきた。

軍事査閲に立ち会わず

生徒たちは阿部を「ベア」（熊）というあだ名で呼んだ。「アベ」をひっくり返したわけだが、小太りで色が黒く、チョビひげを生やした風貌からぴったりのニックネームだった。阿部は生徒たちに、校内では上靴を履かず裸足で歩くことを奨励した。

阿部には一つの逸話がある。一九三〇年（昭和五年）秋のことである。学校の軍事教練を査閲するため、月寒にあった歩兵二五連隊の中佐が査閲官として来校した。しかし阿部は「査閲は軍がやればいいのだ」と、その査閲に立ち会わず、校長室で静かに本を読んでいた。このことが軍の上層部に報告され、問題になった。

翌年、阿部は函館中学校長に転出した。校庭に集まった生徒を前にした別れのあいさつで、「人を殴るな。人を殴るやつは馬鹿だ。これが糖尿病の阿部と作が最後に諸君に残す言葉だ」と言って学校を去った。阿部は生徒たちに何を伝えたかったのだろうか。

満州事変が勃発したのはその年の九月である。日本は長い戦争の時代の入口で一步を踏み出そうとしていた。

戦時色が一段と強まった一九四〇年（昭和一五年）、物資不足で学校への燃料配給が激減した。その時、学校林が役に立った。生徒たちは二中山の間伐材を運び出し、校庭で炭焼きをして木炭をつくった。「五〇年もすれば役に立つ」と言った阿部の先見の明は、彼が二中を去って一〇年足らずで証明されたわけである。しかし、それは阿部が思い描いていた学校林の活用の姿とはほど遠いものであった。

■軍事教練

学校教練とも言う。一九二五年から始まり、行進や射撃、手旗信号、測量などの実技のほか戦史などの軍事知識を学んだ。

■満州事変（一九三一年九月）

中国奉天郊外の柳条湖で関東軍（日本陸軍部隊）が南満州鉄道を爆破し、これを中国軍の行為であるとして軍事行動を展開、ほぼ満州全域を占領した。三十二年三月に傀儡国家「満州国」をつくった。

「札幌市民の森」に指定

戦後の学制改革で、「二中山」は西高に引き継がれた。PT会や輔仁会の管理を経て、植林木を売却した資産とともに財団法人札幌西高会の財産となり今日に至っている。

植林開始から創立八〇周年の記念植樹が行われた一九九三年までに植えられた樹木は延べ八万本に上る。北電との地役権設定契約などで賃貸料を得ているほか、南の沢の一部が札幌市の「市民の森」の指定を受け、森林レクリエーションの場として活用されている。これにより年間百万円程度の奨励金を得ており、西高会運営の貴重な資金となっている。

時代の変化とともに、生産財としての山林の資産力は薄れたが、一方で森林浴や野鳥観察など、自然とのふれあいを深める環境財としての価値が評価されている。南の沢山林には多くの市民が訪れ、盤溪山林もバードウォッチングの隠れたフィールドとして親しまれている。地球環境問題



「西高山」の標識が立つ盤溪の学校林

が叫ばれる今、学校林の本当の価値が見直されつつある。それこそが、「造林育人」を掲げた阿部の夢であり、理想ではなかったろうか。

盤溪の学校林、標高三四〇メートルの山頂には、遥かに続く緑の山並みを見渡すように「西高山」の標識がつつましく、しかし誇らしげに立っている。